

都城市文化財調査報告書

第 2 集

祝 吉 遺 跡

1982年

都 城 市 教 育 委 員 会

序

昨年度に引きつづき実施しました祝吉遺跡の発掘調査の結果を、本市文化財調査報告書第2集として刊行することになりました。

この調査は宮崎県教育委員会のご指導と多大のご協力によって行なったものであります。特に調査の計画、実施、整備、更に調査書の作成に献身的に従事していただいた県教育庁文化課の面高哲郎主事に負う処が大変大きく、あわせて衷心より謝意を表します。

また、前回同様積極的にご協力いただきました高橋正利祝吉自治公民館長ほかの地元のかたがた、また種々ご配慮いただいた都城市の関係部課に対しても心からお礼を申しあげて序とします。

昭和57年3月1日

都城市教育長 刀 坂 守 信

例　　言

1, 本書は、祝吉・郡元土地区画整理事業に伴ない、都城市教育委員会が実施した
祝吉（いわよし）遺跡の発掘調査概報である。

2, 発掘調査は、昭和56年9月21日から同年11月15日まで実施した。
3, 調査関係者は次の通りである。

調査主体

都城市教育委員会

教　育　長	刀　坂　守	信
教　育　次　長	井　之　前	尚
図　書　館　長	北　郷　昭	二
図書館長補佐	松　下　義	弘
文　化　財　担　当	遠　矢　昭	夫
調　　査　員	面　高　哲	郎

(県教育庁文化課主事)

宮崎県文化財保護指導委員　児　玉　三　郎

- 4, 祝吉遺跡の出土遺物は、都城市立郷土館に保存、展示される。
- 5, 遺物整理にあたり、輸入陶磁器については、亀井明徳氏（九州歴史資料館）の、
石器の石材同定については、宮脇繁氏（宮崎県総合博物館）の助言をいただいた。
- 6, 住居内出土の炭化材の樹種識別は、宮崎大学農学部大塚誠講師に委嘱した。
- 7, 本報告の実測は、岩永哲夫、面高哲郎、北郷泰道、永友良典、山中悦雄、菅付
和樹で行ない、トレスは面高山中が行った。執筆、編集は面高があたった。

本文目次

第1, 序 説	1
1. はじめに	1
2. 調査の経過	1
第2, 遺跡の位置	2
第3, 調査の概要	4
1. 縄文時代の遺物	4
2. 弥生時代の遺構と遺物	4
遺 構	4
(1)第6号住居跡	4
(2)第7号住居跡	7
(3)第9号住居跡	9
(4)第10号住居跡	10
(5)第13号住居跡	12
遺 物	13
(1)第7号住居跡出土遺物	13
(2)第10号住居跡出土遺物	17
(3)第18号住居跡出土遺物	19
(4)その他住居跡出土遺物	19
3. 中世の遺構と遺物	22

遺 構	2 2
遺 物	2 3
第 4，結 語	2 3

挿 図 目 次

第1図 遺跡の所在地	8
第2図 遺構分布図	5
第3図 第6号竪穴住居跡実測図	6
第4図 第7号竪穴住居跡実測図	8
第5図 第9号竪穴住居跡実測図	9
第6図 第10号竪穴住居跡実測図	11
第7図 第13号竪穴住居跡実測図	12
第8図 第7号竪穴住居跡出土遺物	14
第9図 第7号竪穴住居跡出土遺物	15
第10図 第7、10号竪穴住居跡出土遺物	16
第11図 第7号竪穴住居跡出土遺物	17
第12図 第10号竪穴住居跡出土遺物	18
第13図 第13号竪穴住居跡出土遺物及び縄文土器	20
第14図 第11、12号竪穴住居跡出土遺物	21
第15図 第1号竪穴住居跡出土遺物	22
第16図 溝状遺構断面図	22

図 版 目 次

図版 1. (1)溝状遺構

(2)溝状遺構D溝と第4号竪穴住居跡

图版2. (1)第1、2号竖穴住居跡

(2)第5号竖穴住居跡

图版3. (1)第6号竖穴住居跡

(2)第9号竖穴住居跡

图版4. (1)第7号竖穴住居跡

(2)第7号竖穴住居跡遺構

图版5. (1)第7号竖穴住居跡貯藏穴

(2)第7号竖穴住居跡出土遺物

图版6. (1)第10号竖穴住居跡

(2)第10号竖穴住居跡出土遺物

图版7. (1)第
区遠景

(2)第11号竖穴住居跡貯藏穴

图版8. 祝吉遺跡出土繩文土器・第13号竖穴住居出土遺物

图版9. 第7号竖穴住居跡出土遺物

图版10. 第7号竖穴住居跡出土遺物

图版11. 第11号竖穴住居跡出土遺物

图版12. 第1、11号竖穴住居跡出土遺物

图版13. 第12号竖穴住居跡出土遺物

图版14. 祝吉遺跡出土中世遺物

第Ⅰ章 序 説

1. はじめに

祝吉遺跡は、昭和55年9月、都城市区画整理課が行っている祝吉、郡元土地区画整理事業の工事中発言された遺跡である。都城市教育委員会では、昭和55年9月24日から10月17日まで昭和55年度事業区の発掘調査を行い、弥生終末期の竪穴住居跡7、中世の住居跡及び溝状造構が発見されている。

昭和55年調査された地区的東50mの昭和56年度工事予定地において、道路取り付けのため掘削されている法面々において竪穴住居らしい落ち込みが、発掘調査時に確認されていた。祝吉、郡元土地区画整理事業は、区画整理を行うと同時に火山噴出物である御池ボラ層（約1mの厚さがある。）を除去し、耕作改良を行うものである。市教育委員会では、昭和55年9月確認されていた遺構の取り扱いについて区画整理課と協議を行ったが、工事遂行上現状保存が困難であったので、事前に発掘調査を行うことになった。

発掘調査は、都城市教育委員会が主体者となり、県文化課主事高哲郎の担当で昭和56年9月21日から同年11月15日まで実施した。

2. 調査の経過

祝吉、郡元土地区画整理事業は、昭和55年より実施されており、昨年度までに今回調査対象地の西隣まで工事は終了していた。本年度の工事は、既に6月より実施されており、調査対象地は、微高地状に、東西30m、南北90mが残されており、その西縁の法面で昨年住居址らしい落ち込みが確認されている。調査対象地の南200mの工事区内でも土器片が散布したことにより、祝吉遺跡は広範囲にわたるものと予想される。

調査対象面積は約2700m²であったが、堆土置場の関係等で完掘したのは、約1800m²である。

調査は、対象地の中軸線（A—B、C—D）によって4区に分け、北西より右回りにI、II、……区と呼称する。重機による表土剥ぎの前に中軸線線上で包含層確認のため0.5m×2mの試掘溝を入れる。第1次調査の際確認されている遺物包含層である御池ボラ層上の黒色土（ボラを若干含む）は、厚さ30cm前後あり、黒色土層において遺構らしい落ち込みも存在したことから、遺構の残存度は良好と予想された。

重機による表土剥ぎ後、弥生時代の竪穴住居跡、中世の溝状造構及び柱穴群がI、IV区で明瞭

に確認され、Ⅰ、Ⅲ区では土質のため遺構プランの確認は困難であったが、整地の結果、調査区全域に弥生時代の遺構が、北半には中世の遺構が存在することが確認された。

第2次の調査では、弥生時代の竪穴住居跡、13(十1)、中世の溝状遺構及び多数の柱穴等が検出され、祝吉遺跡では、竪穴住居跡が第1次の7軒を含め20軒が発見されたことになる。発掘調査は、頭初、10月9日までの20日間の予定であったが、遺跡の重要性を鑑み、区画整理課へ調査期間の延長を申し入れる。協議の結果、17日間の期間延長が行われ、9月21日より実施された調査は、最終的に11月15日に終了した。

遺跡は、調査終了後、1mほど削平され、現在畠地として利用されている。

第二章 遺跡の位置 (第1図)

祝吉遺跡は、都城市祝吉町に所在し、今回調査を実施したのは、祝吉町5702、5703、5707、5108番地である。

都城盆地中央部には、流路を北にとる大淀川が貫流している。その西岸、窮島山系東麓には成層シラス、東岸の飼塚山地西端には扇状地が広がり、特に盆地東南部に発達する。この扇状地上に都城市街地はある。祝吉遺跡は、市街地の北、扇状地北縁に位置する。この付近は、大淀川支流である神水川により侵食を受け低位河岸段丘状となっており、標高約150m、神水川流域に発達する冲積地との比高差は約10mである。遺跡北の段丘縁には、伏流水の湧き出る所があり、同様な所は扇状地上に各所あり、泉等が形成されている。扇状地上は、遺跡の立地のための好条件を備えているといえよう。



第1図 遺跡の所在地(○印)

第Ⅲ章 調査の概要

第2次調査で検出された遺構は、弥生終末期の竪穴住居13、中世の溝状遺構5及び多数の柱穴である。(第2図)遺構は検出されていないが、縄文土器片も数点出土している。

弥生時代の竪穴住居跡はI、II区で7軒、III、IV区で6軒の計13軒である。住居跡の平面プランは、方形を基本とし1辺4~6mであるが、7号住居跡のように1辺が約8mにも及ぶ大型住居跡もある。内部施設としては、間仕切り的機能をもつ突出部、ベッド状遺構、貯蔵穴等をもつ。13軒の中で、1号と2号は、道路建設等により西半が失われ、3号と4号は、中世の溝により切断されていた。6号は、多量の堆土下に位置していたため完掘まで至らなかった。第Ⅲ区北西隅の中世溝により一部破損する1辺2mの落ち込みからは、弥生終末期の土器片が出土していることなので、ベッド状遺構をもつ住居跡の中央床面であった可能性がある。

中世の溝は調査区北半で5条発見されている。東よりA、B、……と呼称することにする。検出された溝の形態は、A、B溝がU字形、C、D溝がV字形となっており、A、D溝はL字状に走行し、東及び北へ延びている。第Ⅲ区、第9号住居跡の北には、炭化材が幅2.5mの範囲に平面的に広がる部分が1ヶ所あり、糸切りの土器片を共伴していたことから、中世の溝とは同一時期のものと考えられる。

1. 縄文時代の遺物 (第13図)

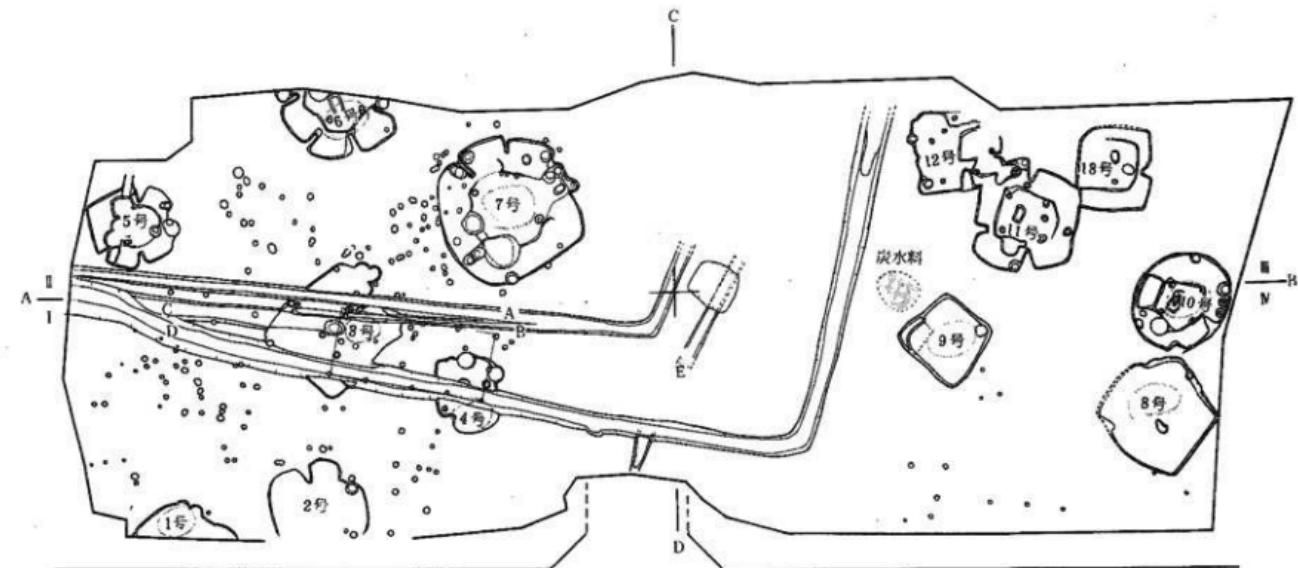
縄文時代の遺構は検出されていないが、調査第I、II区において、縄文土器片が数点出土している。9号は、凸帯をもつ口縁部である。凸帯上にはヘラ様工具により上あるいは下方向より縦位の短沈線文があり、凸帯直下には横走する沈線文がある。口唇部には、指頭による押圧がみられる。10~12号は胴部片である。貝殻条痕文を地文とし、横走あるいは斜走する沈線文がヘラ様工具によって、わりに深く施文されている。9~12号はいずれも赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成はよい。

2. 弥生時代の遺構と遺物

遺 構

(1) 第6号住居跡 (第3図)

II区の東縁で発見された住居跡である。堆土置場の関係で調査したのは2分の1であるが、1辺約5mのと考えられる隅丸方形プランで胴のやや膨む竪穴住居跡である。壁は約40cmが残されている。突出部は各辺にあり、4ヶ所もつ。突出部は、40~50cmの幅で約1.2m延びて



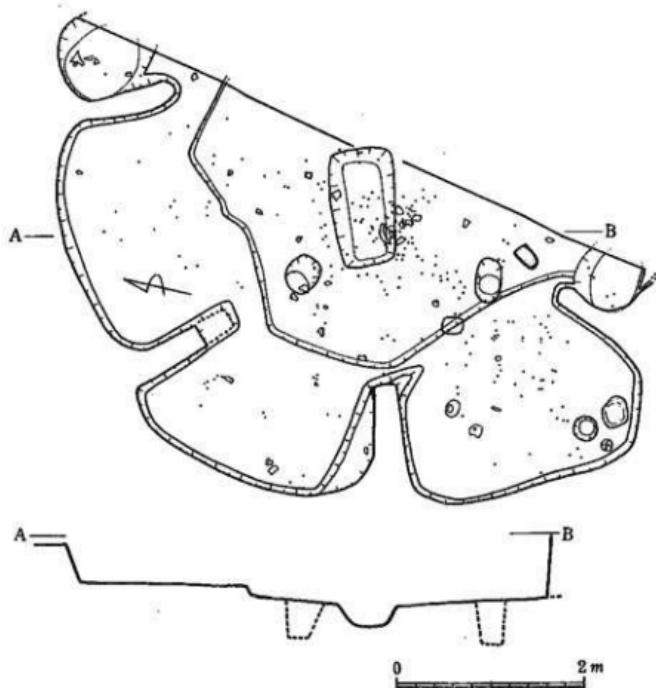
第2圖

遺構分布図



おり、突出間は約1.5～2.2mである。ベッド状遺構は全局しており、その幅は1.5～2.0mあるが、突出部はベット状遺構縁までは延びていない。中央床面の平面プランは、2分の1の調査のため全様は明らかでないが、突出部付近で折れている。柱穴は2ヶ所確認されている。中央床面のほぼ中央部に60cm×125cmの長方形プランの落ち込みがあるが、焼土等は確認されていない。貯蔵穴は2ヶ所検出されており、いずれも突出部のつけ根の部分に位置している。北の貯蔵穴は径約1m、深さは46cmを測り、底付近で高杯の脚部等が出上している。南の貯蔵穴は径約70cm、深さ40cmを測る。

出土遺物は、土器中心で中央床面中央部に集中するが、打ちガワ片かと思われる鉄器等も出土している。突出部で区画された南のベッド状遺構においては、その床面には直立して、口縁部を欠損する壺、受部を欠損する器台の脚や、扁平に近い河原石などが出土している。



第3図 第6号竪穴住居跡実測図

(2) 第7号住居跡 (第4図)

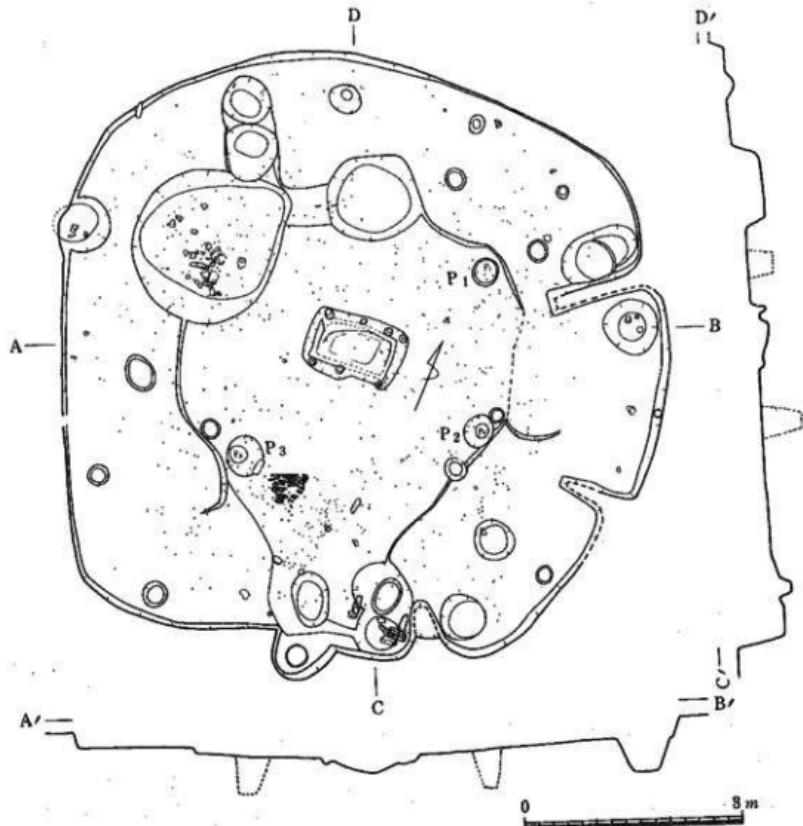
第1区の南に位置し、最大規模を有する竪穴住居である。西辺及び南辺は直線的に延び、北辺及び東辺は膨む、扁圓丸方形プランをなす。規跡は中軸線東西8.25m、南北8.10を測り、壁は20cm残されている。突出部は、東辺から南辺にかけて3ヶ所あり、幅は35~60cmで1~1.5m延びている。突出間は、約2.3mである。ベッド状遺構は、1.5mから2mの幅をもって四周を巡っているが、南辺において一部切れており、U字形を呈している。高さ約10cmであるベッド状遺構の切れている南壁には、幅1.9cmで外へ最大60cm張り出し部があり、径40cm前後のピットが4ヶ所近接している。ベッド状遺構切断部から北へ1.2mにかけては、粘土が一面検出されている。その上部に径2cmの炭化材がほぼ東西方向に並んでいた。

中央床面は、五角形を呈するが、その中央部に85cm×130cmを測る長方形プランの落ち込みがある。落ち込みには、幅15cm前後の周溝が巡り、周溝中には径約10cmの小ピットがあり、南辺に3ヶ所、北辺に4ヶ所が検出されている。この小ピットは、何か立てていたようでもあり、7号住居跡内で、長さ25cm、厚さ5cm前後の河原石が10個近く出土しているが、これが小ピットと関係あるかないかについては今後の検討を要する。

貯蔵穴は、東辺の突出部のつけ根で3ヶ所、西壁で1ヶ所確認されている。遺物を伴う貯蔵穴は2ヶ所あり、特に東辺の北突出部南で確認された貯蔵穴からは、小型土器等が直立して出土している。西壁の貯蔵穴からは床面付近で長頸壺の頸部が出土している。住居内北、ベッド状遺構上には、2ヶ所の不正円形プランの竪穴があり、1つは径2.5m、深さ30~40cm、1つは径1.2m、深さ約20cmを測る。西の竪穴からは、壺、高杯、手捏ね土器等が出土している。

ピットは、ベッド状遺構上、中央床面で検出されているが、第7号住居跡に伴う主柱穴はP1~P3と考えられる。いずれも径40cm前後で深さは30~50cmである。ベッド状遺構上に位置する径20cm前後のピットは深さが最大20cmで、中世のものと考えられる。

出土遺物は、土器、石器、鐵器等で住居内全域より出土しているが、特に中央床面南部に集中する。出土遺物の中で注目されるのは、多くの完形の石包丁、手捏ね土器、底部に貫通孔のある土器等の出土である。石包丁は、中央床面南部及び東辺ベッド状遺構上のほぼ床面において出土している。底部に貫通孔のある土器は2点出土しており、1は、径9.1cmの鉢形土器、1つは手捏ね土器である。前者は東壁際北よりではば直立して、後者は南よりの西壁近くで倒立して出土している。



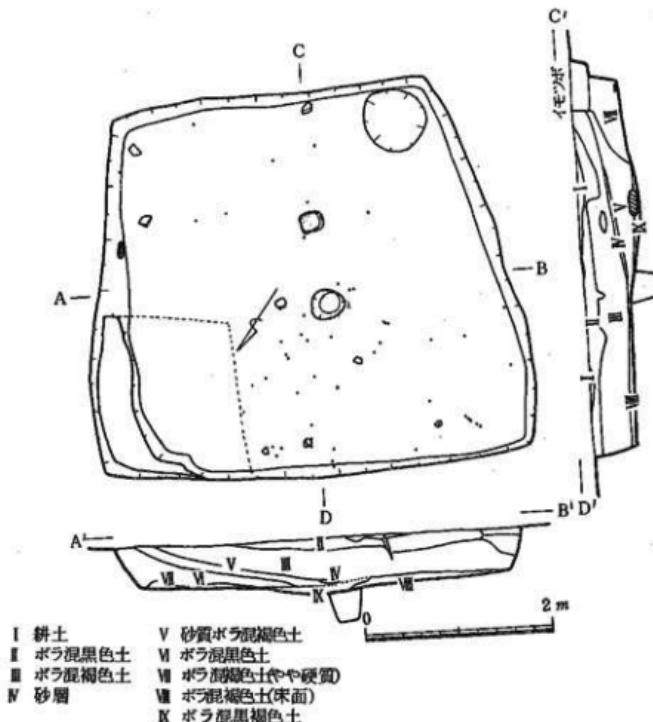
第4図 第7号竪穴住居跡実測図

(3) 第9号住居跡 (第5図)

第N区中ほどに位置する梯形をなす住居跡である。9号は、北辺4.5m、東辺3.25m、南辺3.35m、西辺4.1mを測る規模の小さい住居跡で突出部はない。柱穴は、中央やや西よりに1ヶ所ある。床面中央部には、緩かな傾斜をもつ落ち込みがあるが焼土はない。南隅には、径6.5cm、深さ2.5cmの竪穴があり、これは貯蔵穴とも考えられる。

9号住居跡では、貼床と考えられるものも確認されているが、北隅においては、祝吉遺跡のベッド状遺構が削り出しであるのに対して、貼床によるベッド状遺構らしいものも検出されている。

出土遺物は、その量は少ないが、住居内中央部を中心において、床面などから小型の鉢等が出上している。



第5図 第9号竪穴住居跡実測図

(4) 第10号住居跡 (第6図)

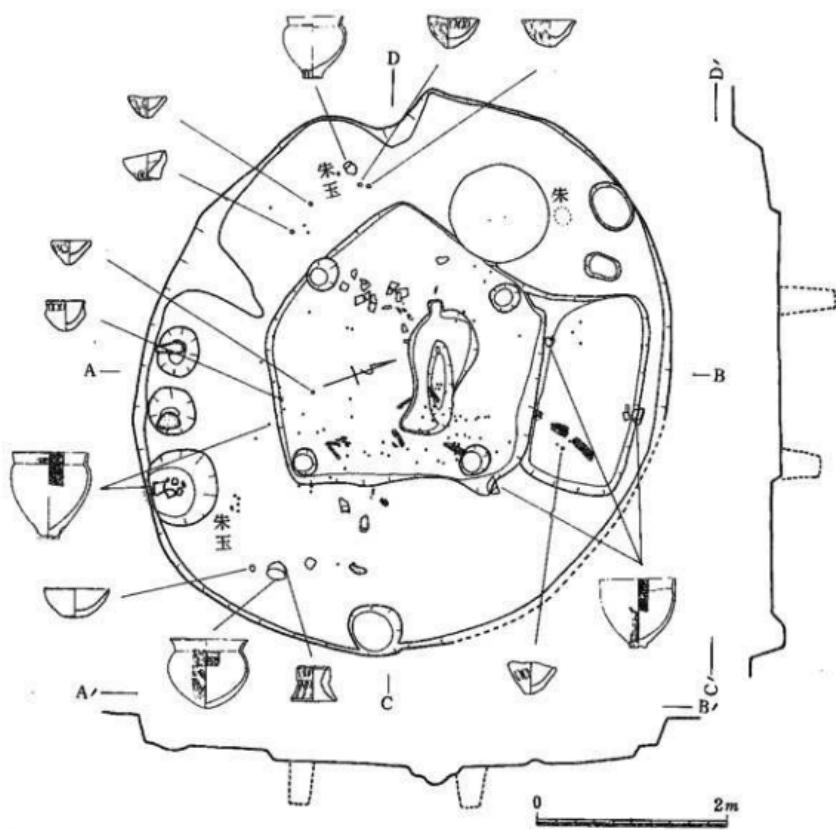
調査区の南端で検出された住居跡である。平面プランは梢円形で、長径6.0m、短径5.1mの規模をもち、間仕切り的機能をもつ突出部が2ヶ所ある。壁高は30~40cmが残されている。住居内には、ベット状造構が1.2mから1.7mの幅をもって巡っており、ベット状造構の床面は、中央床面より約10cm高くなっている。中央床面は五角形をなし、その中央部には、長辺135cm、短辺50cm、深さ約30cmが計測される二段掘りの不正隅丸長方形の落ち込みがある。この落ち込みから焼土は検出されていない。中央床面の隅ないし際では4個のピットが検出されている。ピットは径約30cm、深さ40~60cmあり、ピット間は180~190cmが計測される。4個のピットは、住居の主柱穴と考えられる。

住居内西にある2ヶ所の突出部は、それぞれ約50cmないし90cmの長さであり、突出間は約2mである。この突出部によって、ベッド状造構が区画され、一空間が設定されている。この区画された部分のほぼ床面において、倒伏した朱のはいる小型甕形土器や、径4cm前後の手捏ね土器が4個、直立して検出され、また、朱塗りの土器片や朱玉様のものが出土している。

中央床面西半においては、朱塗りの大型壺片も出土している。

突出部の東の壁際には、竪穴が3ヶ所並んでいる。西端の竪穴は、長径52cm、短径42cm、深さ15cmである。その中央には、長さ40cm、最大幅12cm、厚さ5cmの扁平な河原石が壁へよりかかる状態で検出されたが、この河原石は本来竪穴に立てられていたものと考えられた。真中の竪穴は、径約50cm、深さ12cmで1個の河原石がある。東端の竪穴は、径約80cm、深さ37cmあり、わずかに壁下へはいる袋状となっている。床面からススの付着する甕形土器が出土している。この他、東壁においても径約55cm、深さ21cmの竪穴が検出されている。

10号住居跡からは、この他高杯、壺、鉢や把手かと思われる部分等が中央床面東半に集中して出土している。石器は、石包丁、砥石、石製品が出土しているが、石包丁は、中央床面西よりの位置で、床面より10数cm浮いた状態であった。

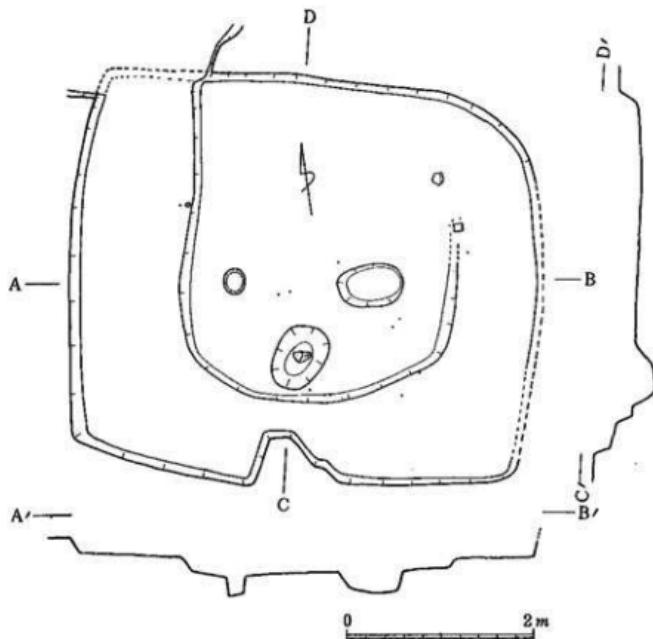


第6図 第10号竪穴住居跡実測図

(5) 第13号住居跡 (第7図)

調査区南で、第11号と接して検出された住居跡である。平面プランは長方形で長辺4.75m、短辺4.35mが計測される。南辺中央部に1ヶ所の突出部があり、ベット状遺構は、住居内の西辺、南辺及び東辺の一部で確認されている。ベッド状遺構の幅は西辺で約110cmあり、床面の高さは中央床面より20cmほど高くなっている。ピットは3ヶ所検出されているが、柱穴と考えられるものも中央西へ偏する径約40cm、深さ40cmの1ヶ所である。

出土遺物は少ないが、中央床面では鉄器片、縁泥片岩のチップ等が出土している。住居跡東半では、床面からわずかに浮いた状態であったが、弥生中期のL字状突堤をもつ甕片などが出土している。



第7図 第13号竪穴住居跡実測図

遺 物

(1) 第7号住居跡出土遺物 (第8, 9図)

壺形土器は、長頸壺（第8図3）、二重口縁壺（第8図4, 5, 6）、短頸壺（第8図8, 9）などが出土している。3は口径12.1cmあり、全面にススが付着している。口縁部は若干肥厚し、波状文が施されている。頸部はヘラミガキされている。胎土は粒子が粗く、砂質様の感を与える。4～6は、頸部が大きく外反し、矮をつくって反転している。反転部に波状文がみられる。口径は4で13.1cm、5で15.0cm、6で16.1cmを測る。胎土に砂粒を含む。8, 9は口縁部が短く外反し、9の口縁端は丸くおさめられ、8は若干つまみ上げ状となっている。肩部はあまり張らず、長胴形となすと考えられる。7は、口縁部を欠損するがほぼ完形に復原できた壺である。口縁部は、直線的に開き、底部は不安定な平底である。最大径は胴部中位にあり、約22cmと推定される。厚さはわりに厚く1cm内外あり、胎土に砂粒を含む。頸部及び胴部のハケ目は微細であり、口縁部のハケ目はナデ消されている。

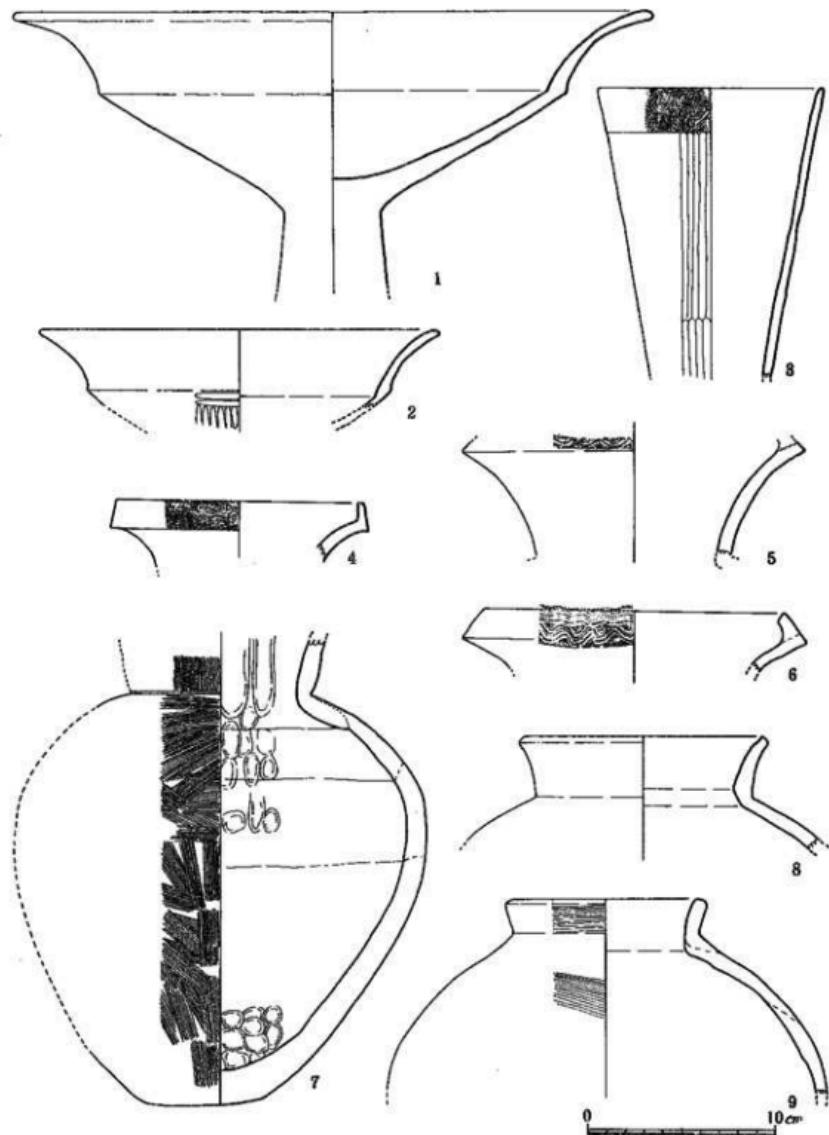
高杯形土器は、口径3.0cm前後（第8図1）と2.0cm前後（第8図2）との2種ある。杯部下半は内擡して伸び、上半部は大きく外反する。器面はヘラ磨きである。

壺形土器（第9図1）は、口縁部が内傾ぎみに立ち上がり、中ほどより外反している。口縁部外面は、ハケにより肩部に段をつくり上へカキ上げた後、ヨコナデされている。2は、口径13.2cmあり、段をつくらないカキ上げがみられ、口縁端部は丸くおさめられている。

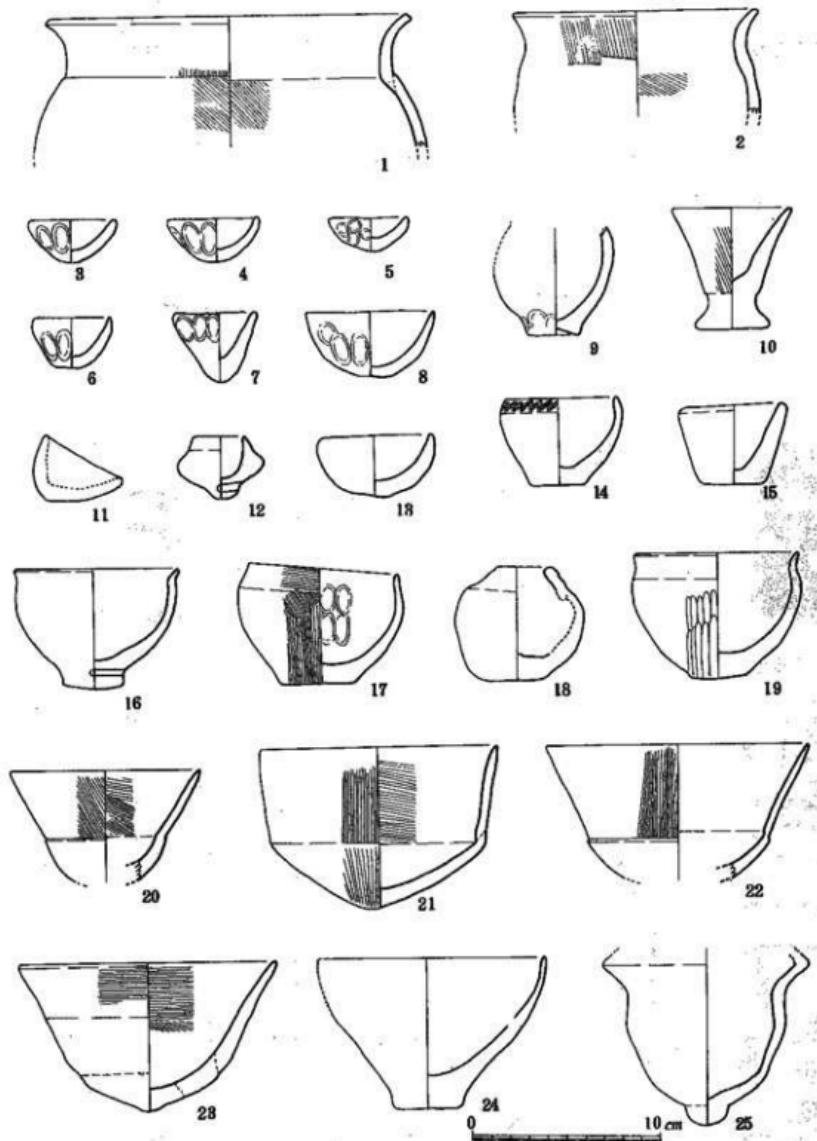
第9図の20～23は小形丸底土器である。口縁部が長く直線的に外上方に開き、体部は小さい。20の調整は口縁部をハケ、体部はヘラミガキである。21は口縁部、体部ともハケ目である。

この他、7号住居跡からは小形の鉢形土器、手捏ね土器が出土している。小形鉢形土器はつくりも丁寧で、ナデ（16）、ハケ（17）、ヘラ（19）で器面調整されており、14には波状文もみられる。手捏ね土器は口径4～7cmで、底部は丸底である。器面に指頭痕を残すものが多い。12及び16の底部には、径4mm前後の貫通孔がある。

石器は、石包丁（第10図1～6）、低石（13）、磨製石錐未製品（11）がある。石包丁は、いずれも方形であり、長さ7～9cm、幅4～5.5cmと小形であり、穿孔は2個を基本とする。石質は粘板岩である。1は、長さ7.6cm、幅3.7cmの片刃の石包丁である。穿孔は3孔あり両面から穿孔されている。右側には縦刻画があるが、何をモチーフしたのか明確でない。3は、両刃の石包丁で未完の穿孔がある。未製品の磨製石錐にも未完の穿孔がみられる。

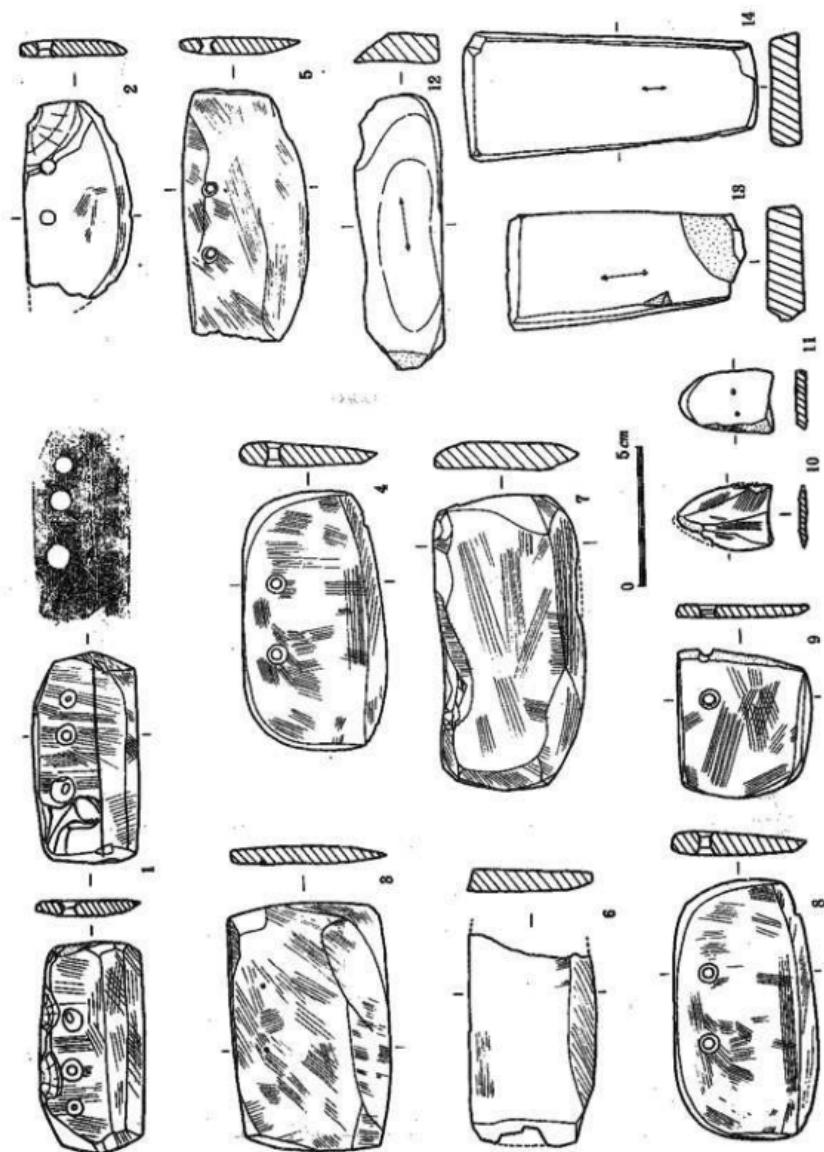


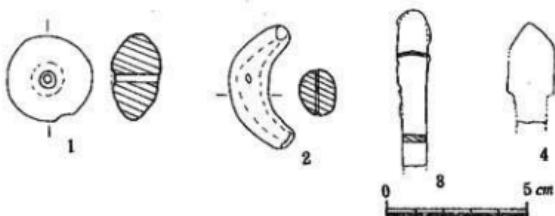
第8圖 第7号窯穴住居跡出土遺物



第9図 第7号竪穴住居跡出土遺物

第10圖 祝吉遺址出土遺物(石器) 7號住居跡(1~6, 11, 18) 10號住居跡(2, 15) 15號住居跡(8) 18號住居跡(12)





第11図 第7号竪穴住居跡出土遺物

鉄器は、錐（第11図8）、鉄鏃（4）が出土している。錐は、現長5.6cm、幅0.9cm、刃長約2.6cmあり、幅は基部よりわずかに広くなっている。刃部の反りはわずかである。

その他、土製品が出土している。第11図1は、そろばん玉様の土製品で径3.0cm、厚さ1.8cmを測る。2は、勾玉様土製品で梢円状の断面をもつ、全長4.4cmあり、中央に径1mmの穿孔が1ヶ所ある。

（2） 第10号住居跡出土遺物（第12図、第10図12）

1は、二重口縁壺の口縁部で反転部に波状文が施されている。口径14.2cm。

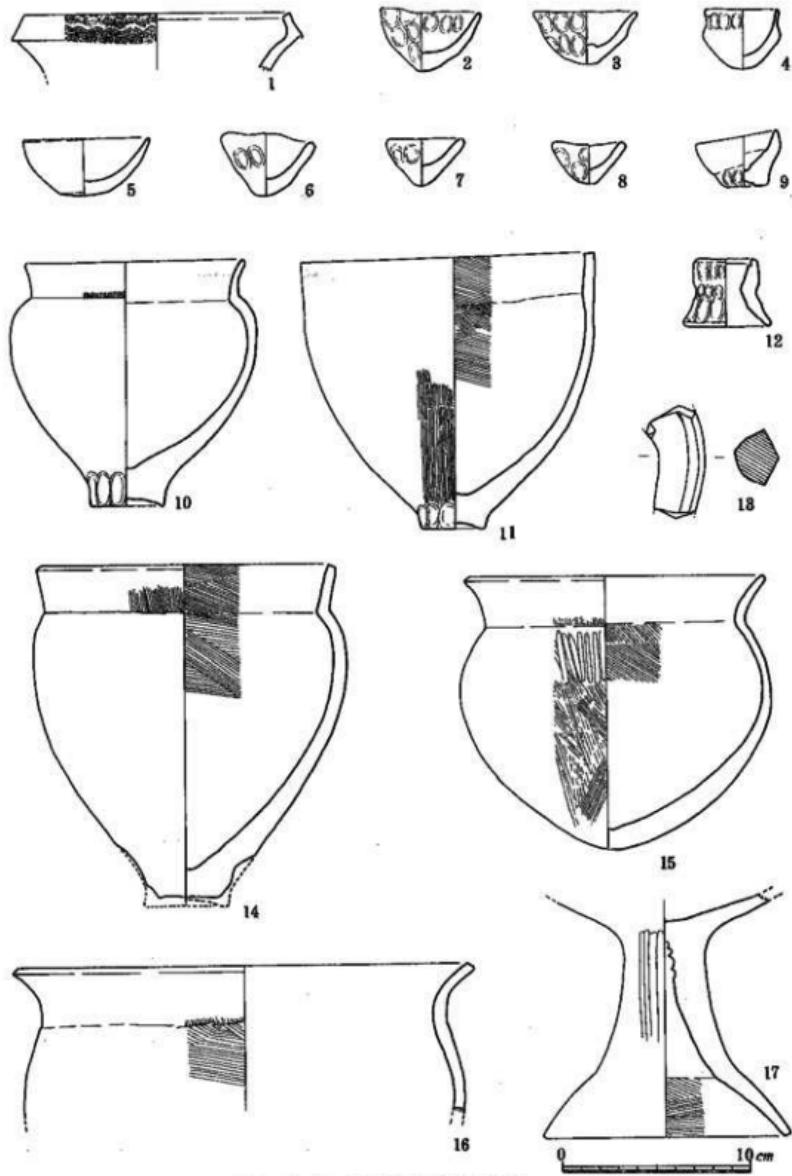
壺形土器は、口縁が外反する口縁（10, 14, 15, 16）と直口する口縁（11）がある。10は、口径11.7cm、器高13cmで最大径は肩部上位にあり13.1cmを測る。口縁部は、内面に稜をつくって外反し、外面は肩部との境に段をつくるカキ上げ後、ヨコナデされている。底部はあげ底で指頭痕を残す。口径15.7cm、器高14.4cmである。14, 16の口縁部の手法は、10の手法に類似する。15は、口径16cm、器高14.5cmの丸底の壺形土器である。口縁部の手法は10の手法に類似しているが、肩部はハケ調整のあとヘラミガキされている。

17は、高杯の脚部で、ラッパ状に開く。筒部はヘラミガキである。

2～9は手捏ね土器で口径4～7cmで多くは指頭痕を残す。4は、口縁部をつまみ上げ肩が張っている。5はハケ調整である。12は、器台形の手捏ね土器で口径3.0cm、器高3.6cmを測る。

19は、把手と考えられる部分である。器面はヘラミガキされ、外側は切り落され、三角状の断面をなしている。

石器は石包丁（第10図8）、砥石が出土している。石包丁は、長方形で長さ9.3cm、幅5.1cmで両面より穿孔された2孔をもつ。刃は片刃である。



第12図 第10号竪穴住居跡出土遺物

(3) 第13号住居跡出土遺物 (第13図1~6, 8)

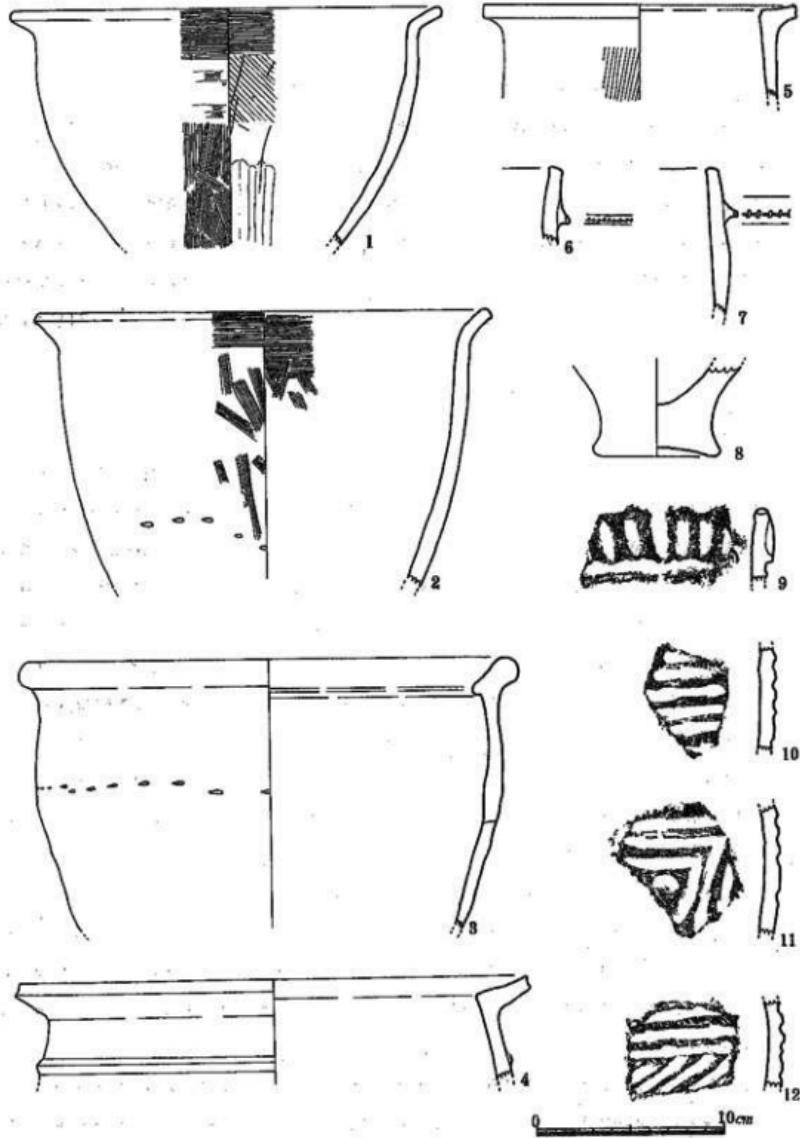
第13号出土土器で圓形土器は、口縁の形態から外反するもの(1, 2)T字状突帯をもつもの(3)、L字状突帯をもつもの(5, 6)、刻目突帯をもつ(6)の4つに分類される。1, 2は、口縁部が短かく外反し、胴部のハケは方向が一定せず短かい。2の胴部下半には米粒大の刺突文がみられる。3の口縁部はT字状をなし、端部は肥厚している。口縁部はヨコナデされ、胴部下半は剥離が著しいがすかにハケ目がみられる。胴部中位には、2に見られた刺突文がある。L字状口縁を有する4は、口縁下に1条の突帯があり、5はタテ方向の荒いハケ目がみられる。

(4) その他住居跡出土遺物 (第14図、第15図)

第14図の1~6は、第11中住居跡の出土遺物である。2, 4, 5は、西突出部つけ根で検出された貯蔵穴から出土している。1は、脚付小形丸底土器と考えられる。口縁部は欠損するが、口縁部と体部の境を示す線がわずかに残存している。2は、小形の無頸壺で口径5.1cm、器高5.4cmである。3は、小形丸底土器で、口縁部は長く、直線的に外上方に開き、体部は小さく浅い。口縁部はハケ調整であり、体部と口縁を画するための沈線が一条巡っている。口径9.6cm、器高6.2cm。4は、口縁部が短かく外反し、体部は扁球形をなす。口径13.2cm、器高11.1cm。5は、底部が高台様になる小形鉢である。口径10.3cm、器高5.8cm。6は、器台で受部の内面に径をもって開き、くびれ部は上位にある。穿孔がくびれ部下にあり、上から下方向の穿孔である。

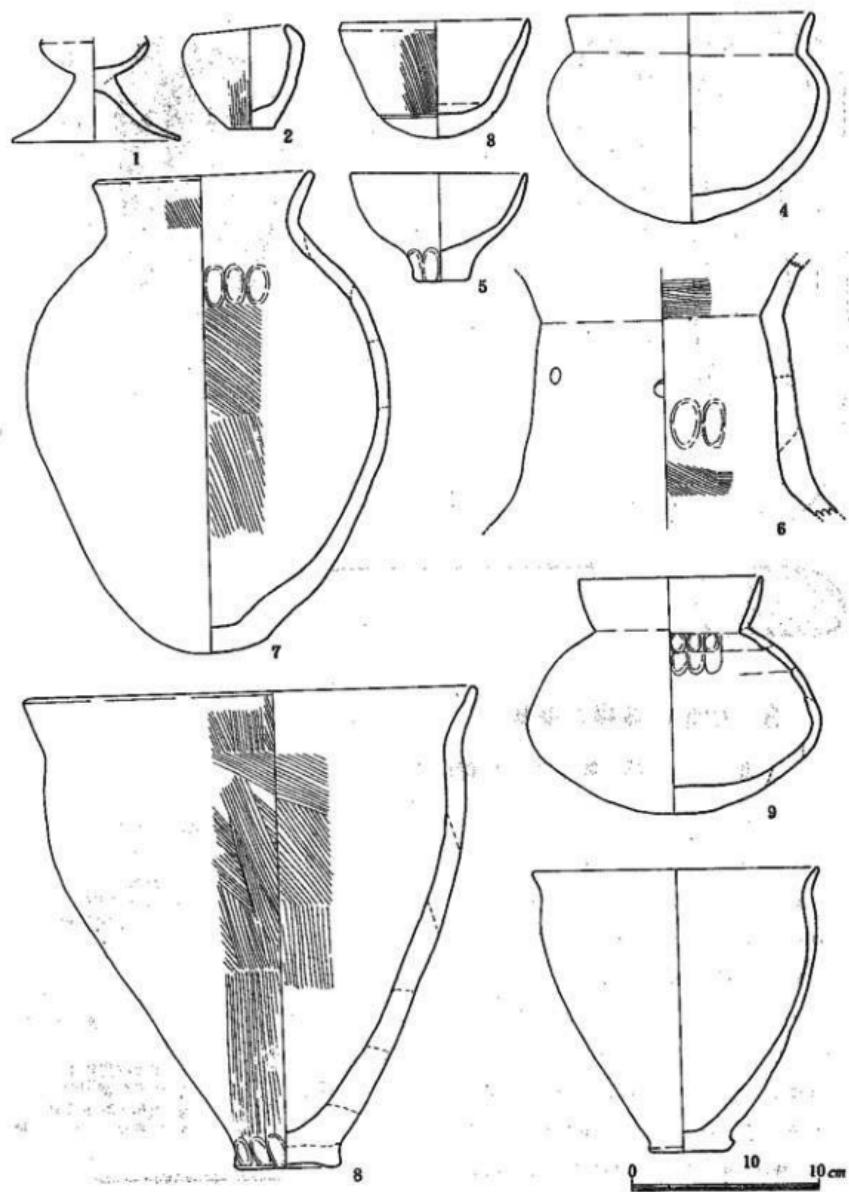
第14図7~10及び第15図7は第12号住居跡出土である。7は、口縁部が短かく外反し、長胴で丸底様の底部をもつ圓形土器である。内外面のハケは粗く、肩部内面に指頭痕が見られる。口径11.7cm、器高19.2cm、器高25.4cm。8は、口縁部が外反し、肩部より直線的に底部へ続く圓形土器である。底部はあげ底で指頭痕を残す。口縁部外面に段を有しないカキ上げがみられる。口径24.1cm、器高25.4cm。9は、口縁部が内巻きに短かく立ち上がり、扁球形の胴部をもつ圓形土器である。最大径は胴部下半にあり、安定感のある土器である。口径9.8cm、胴径15.7cm、器高12.6cm。10は、口縁が短かく外反する圓形土器である。口径15.3cm、器高15.0cm。

第15図1, 2は、第1号住居跡床面より出土した石器である。1は、砥石で幅8.3cm、全長26.5cmあり、両面使用されている。石材は砂岩である。2は、軽石製品で最大幅9.0cm、全長16.3cm、厚さ0.5~2.1cmを測る。

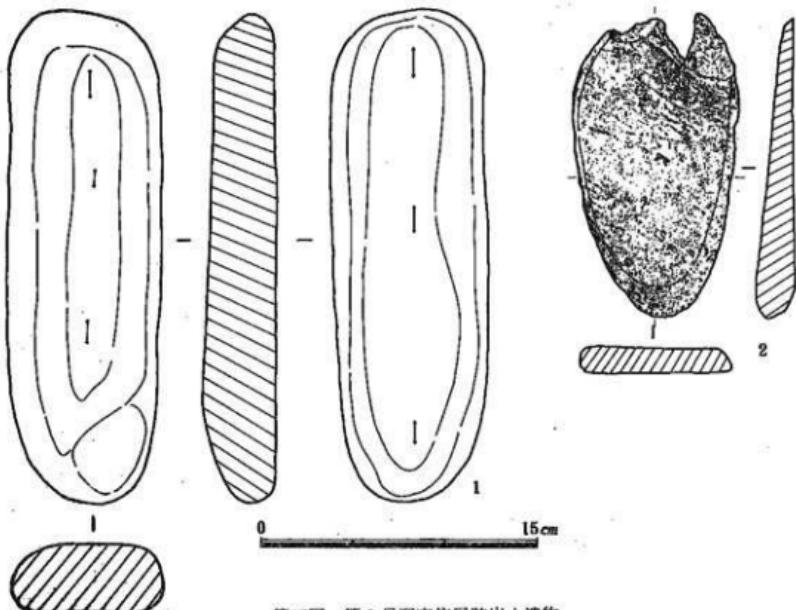


第13図 第13号竪穴住居跡出土遺物及び縄文土器

第13号竪穴住居跡出土(1~6.8)
第12号竪穴住居跡出土(7)



第14図 第11, 12号竪穴住居跡出土遺物



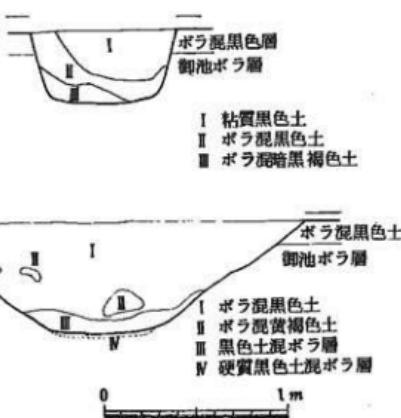
第15図 第1号竪穴住居跡出土遺物

3. 中世の遺構と遺物

遺構 (第2図 第16図)

中世の遺構は、調査北区 (I, II区)において主として溝状遺構及び多くの柱穴が検出された。溝状遺構は5条あり、I, II区で検出された南北に走行する溝は東よりA, B, C, D溝と、IV区で検出され東西へ走行する溝をE溝と呼称することとした。A, B, E溝は断面がU字形をなし、C, D溝はV字形をなしている。

A溝は、上幅80cm、底幅60cm、深さ40cmを測り、床面は、御池ボラ層に掘り込まれている。溝は、東、北へL字状に走行し、床面が若干南へ傾斜するが、御池ボラ層に掘り込まれ



第16図 溝状遺構断面図

た床面は特別な加工がなされていないため、排水的機能はないと思われる。B溝は、中央部でA溝と結合する。

D溝は、断面V字形をなし、北及び東へL字状に走行する。上幅140～220cm、底幅約60cmである。溝は、御池ボラ層に掘り込まれ、床面は、つき固められており、厚さ2～3cmの黒色土混ボラ層の固い面が形成されている。床面の高さは、L字状に折れる付近が最も高く、北及び東へ低くなっている。北端の底には、砂の薄い層も認められたことから排水的機能をもっていたと考えられる。

溝の検出された周辺では、多数の柱穴が検出されているが、建物の規模を知りえたのは、区中ほどのB、D溝上に位置する2間×4間(3.9m×9.1m)の掘立柱建物1棟のみである。この掘立柱建物は、柱穴がD溝の固い床面を掘り下げていることにより、D溝より後出すると考えられる。

遺 物 (図版14)

中世の遺物は、溝中及びその周辺から土師器皿、青磁、白磁、染付、陶器等が出土しているがその量は少ない。土師器は皿のみでいずれも糸切り底である。青磁は、蓮弁文碗、櫛描文碗、盤、縦刻細蓮弁文碗、後花小皿など13世紀から16世紀前半に比定される青磁が出土している。白磁は、高台を抉る小皿、碗などがあり、染付は嘉靖期のものである。陶器には、備前風磨鉢などが出土している。この他、近世の陶磁器も出土している。

第IV章 結 語

第2次の祝吉遺跡の発掘調査では、弥生時代の竪穴住居跡13、中世の溝状造構5及び柱穴群が検出され、これらの造構に伴う遺物の他、繩文土器も出土している。繩文土器は、小片で数点と少ないが、文様の特徴より繩文後期前半に比定される。弥生時代の遺物は、弥生終末期に位置づけられるものであるが、出土土器には、新・旧両要素が認められる。宮崎県下における弥生終末期の資料は、古くから知られていた加納遺跡、下那珂貝塚の資料に加えて、近年、大荻遺跡^{註1}、九谷第1遺跡^{註2}、中無田遺跡^{註3}、灰塚遺跡など調査例の増加とともに、セット関係など好資料も得られており、編年の確立されていない現在、弥生終末期土器の再検討が望まれる。

検出された13軒の竪穴住居跡の中特に注目されるのは、7号と10号住居跡である。7号住居跡は、中輪縫8mを越す大型の竪穴住居で多くの手摺ね土壁、縦刻のある石包丁、また、底部に貫通孔のある土器など特異な遺物を出土している。また、中央床面で検出された周溝及び小ビ

ットを伴う長方形プランの遺構は、その性格については今後の問題として残されるが、7号住居跡の性格を考えるうえで興味ある遺構である。

10号住居跡は、ベッド状遺構上に突出部により一空間が設置されており、その空間よりの朱のはいる小形彫形土器、直立する手摺^{註6}土器、朱玉など出土や、南壁で検出された立石を伴う土壙などから、10号住居跡の性格は、何らかの祭祀に関する住居であった可能性が高い。

祝吉遺跡では、第1次調査で弥生時代の竪穴住居跡7軒、第2次調査で13軒の計20軒の住居跡が検出されたことなり。時期は大半が弥生終末期に位置づけられるものである。第1次調査では、住居跡から線刻画や記号文をもつ土器等が出土しているが、第2次調査では1点の出土も見ていない。このことは、第1次調査では、石器製造の住居跡であった第1号住居跡が、第2次調査では、何らかの祭祀を彷彿させる住居跡が検出されていることより、第1次で検出された住居群と第2次で検出された住居群とではその性格が異なるのかもしれない。

さて、今日の調査で検出された住居跡の内部施設として、突出部、ベッド状遺構、住居の壁際に位置する貯蔵穴等がある。突出部を伴う住居跡の発見例は、大荻遺跡、丸谷第1遺跡、上示野原遺跡の他、近年、鹿児島県隼人町小田遺跡^{註8}、新富町新田原遺跡^{註9}の他大分県下でも報告されてき^{註10}ている。宮崎県下における突出部の初現は從来弥生終末に限定されていたが、近年調査された新田原遺跡では弥生中期末ないし後期初頭に比定され、祝吉遺跡第13号住居跡もほぼ同時期に位置づけられるものであり、弥生中期末には既に成立していることが判明しつつある。特に新田原遺跡の場合、柱穴10突出部の延長上にあり、既に完成されている感がある。

突出部の機能は、間仕切り的機能をもつ点については疑う余地はなくなりつつあるが、間仕切りする目的は、住居内を部屋割りする場合や、住居内に一空間を設置する場合などがあり多様にわたっているようである。突出部をもつ住居は、ベッド状遺構をもつ場合が多く、間仕りを行う目的を推定する場合においては、ベッド状遺構及び、柱穴との関係を考慮する必要があろう。今後の資料の増加を待ちたい。

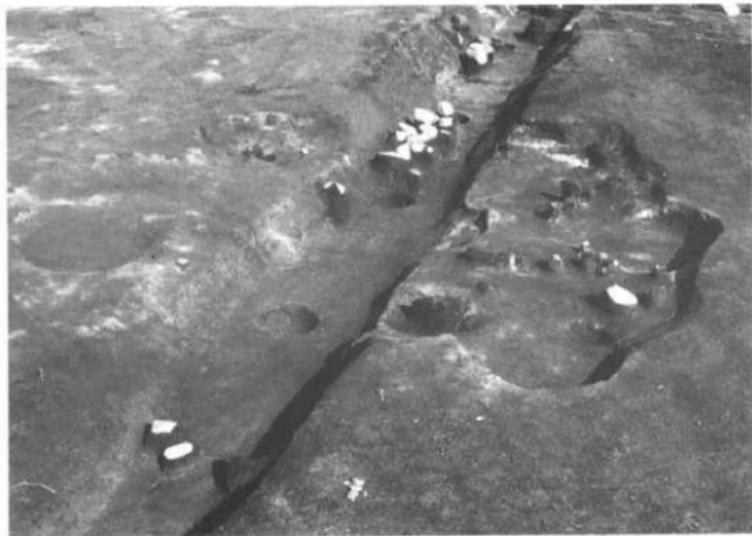
今回の調査で検出された溝状遺構及び柱穴は、中世でも室町時代のものと考えられる。祝吉町内には、古石塔が多く、北郷氏の家臣藤井家に関するものでないかとされる古石塔や、本田家管理の肝属系古石塔などがあり、これらの古石塔が今回、検出された遺構群と関係あるかは明確でない。祝吉遺跡の東隣には土師器片等の散分布も認められ、また、遺跡の東0.8kmには、島津家発祥の地として知られる「祝吉御所跡」もあることから、この地域での中世における考古学的調査研究が進展することが望まれる。

- 註 1 小林行雄、杉原在介編「弥生土器集成 本編 1」 1964
- 註 2 石川恒太郎「宮崎県の考古学」 吉川弘文館 1968
- 註 3 「大荻遺跡(2)」 宮崎県教育委員会 1975
- 註 4 「九州縱貫自動車道埋文化財発掘調査報告書(3)」 宮崎県教育委員会 1979
- 註 5 野間重孝「中無田遺跡出土遺物」 宮崎考古第5号 1979
- 註 6 「九州縱貫自動車道埋文化財発掘調査報告書(2)灰冢遺跡」 宮崎県教育委員会 1978
- 註 7 「都城市文化財調査報告書第1集、祝吉遺跡」 都城市教育委員会 1981
- 註 8 「上示野原遺跡」 宮崎県文化財調査報告書第 1集 宮崎県教育委員会
- 註 9 「小田遺跡」 集人町教育委員会
- 註 10 昭和56年(1981)1月から昭和57年2月にかけて、新富町教育委員会によって調査され、軒の堅穴住居跡が検出され、うち軒が突出部をもっている。
- 註 11 「大野原の遺跡」 大野町教育委員会 1980
- 註 12 本村秀雄氏の教示による。

図 版



(1) 溝状遺構



(2) 溝状遺構と第4号竪穴住居跡



(1) 第1・2号竪穴住居跡



(2) 第5号竪穴住居跡



(1) 第6号竪穴住居跡



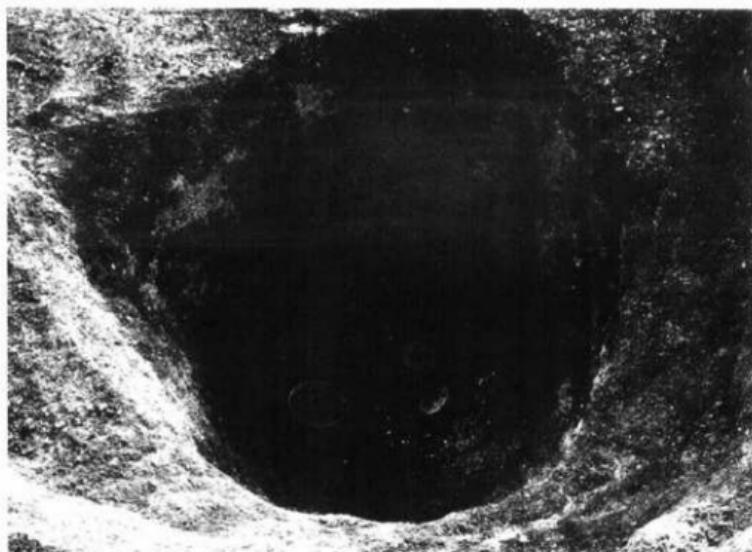
(2) 第9号竪穴住居跡



(1) 第7号竪穴住居跡



(2) 第7号竪穴住居跡遺構



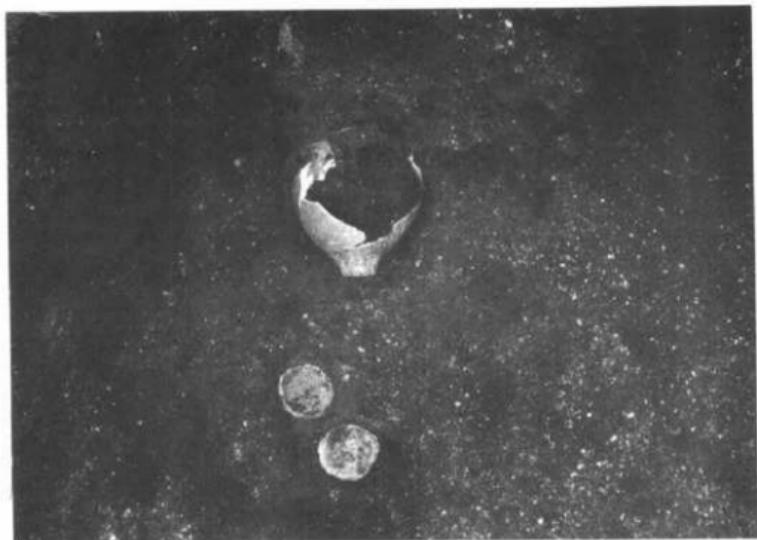
(1) 第7号竪穴住居跡貯藏穴



(2) 第7号竪穴住居跡遺物出土状況



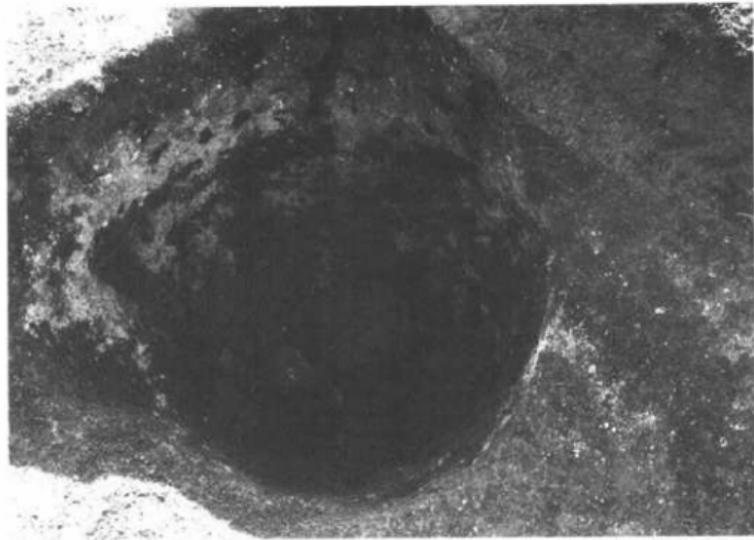
(1) 第10号竪穴住居跡



(2) 第10号竪穴住居跡出土状況



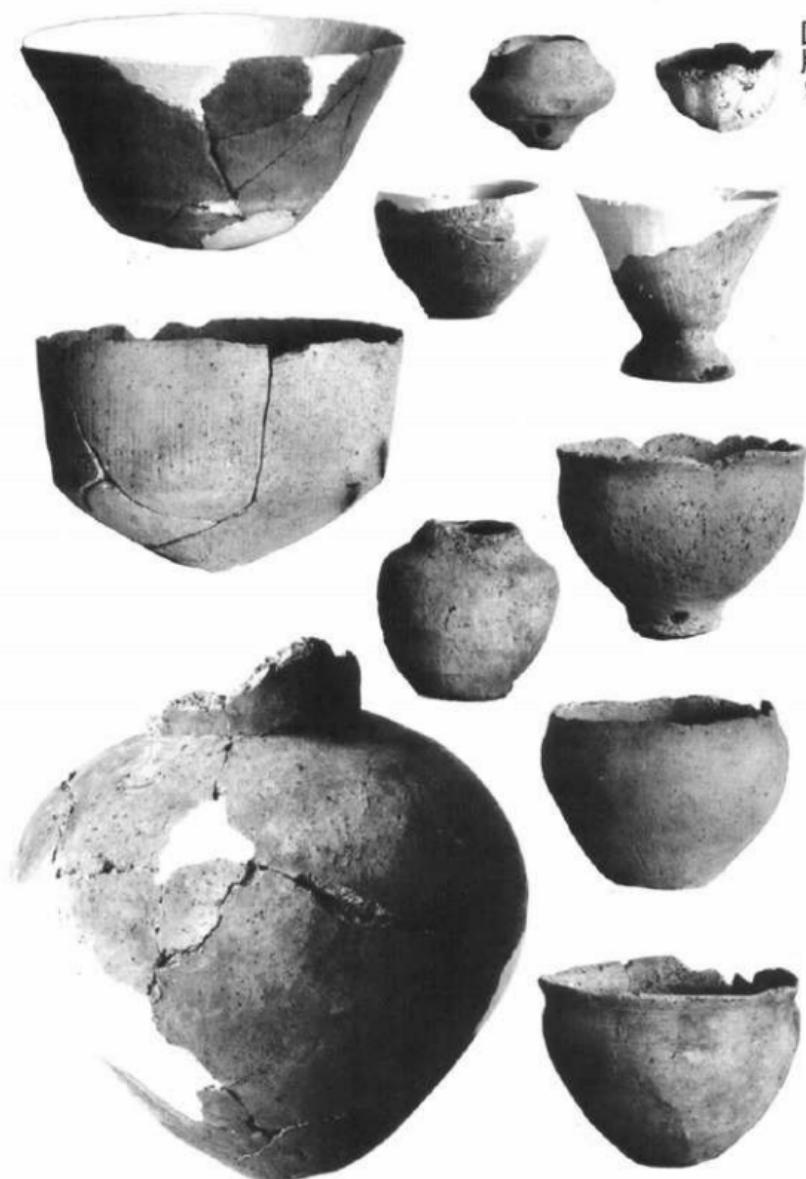
(1) 第Ⅲ・IV区近景



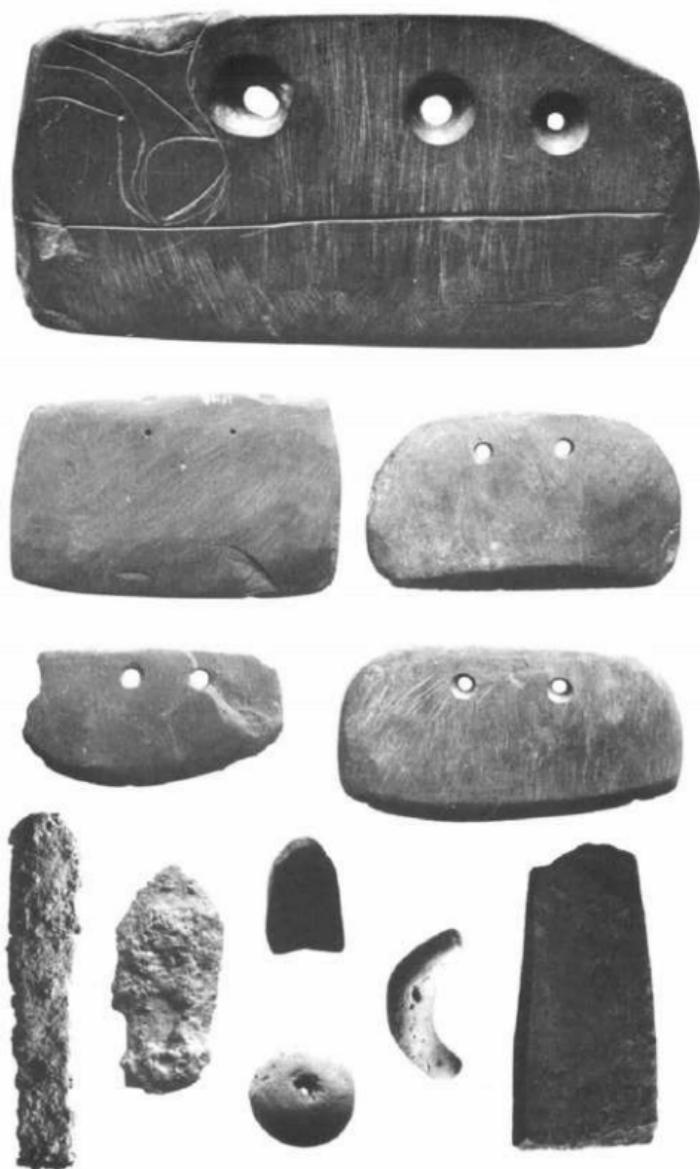
(2) 第11号竪穴住居内貯藏穴



祝吉遺跡出土縄文土器・第13号竪穴住居出土遺物



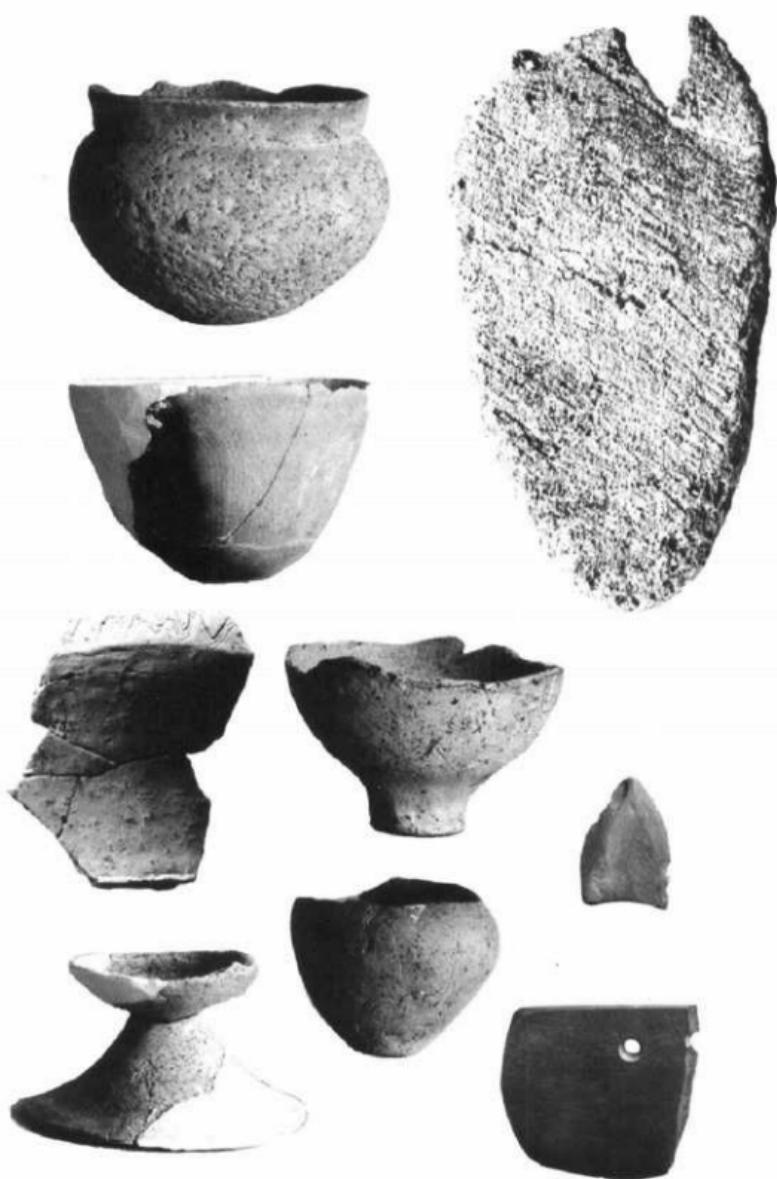
第7号竪穴住居跡出土遺物



第7号竪穴住居跡出土遺物



第10号竪穴住居跡出土遺物

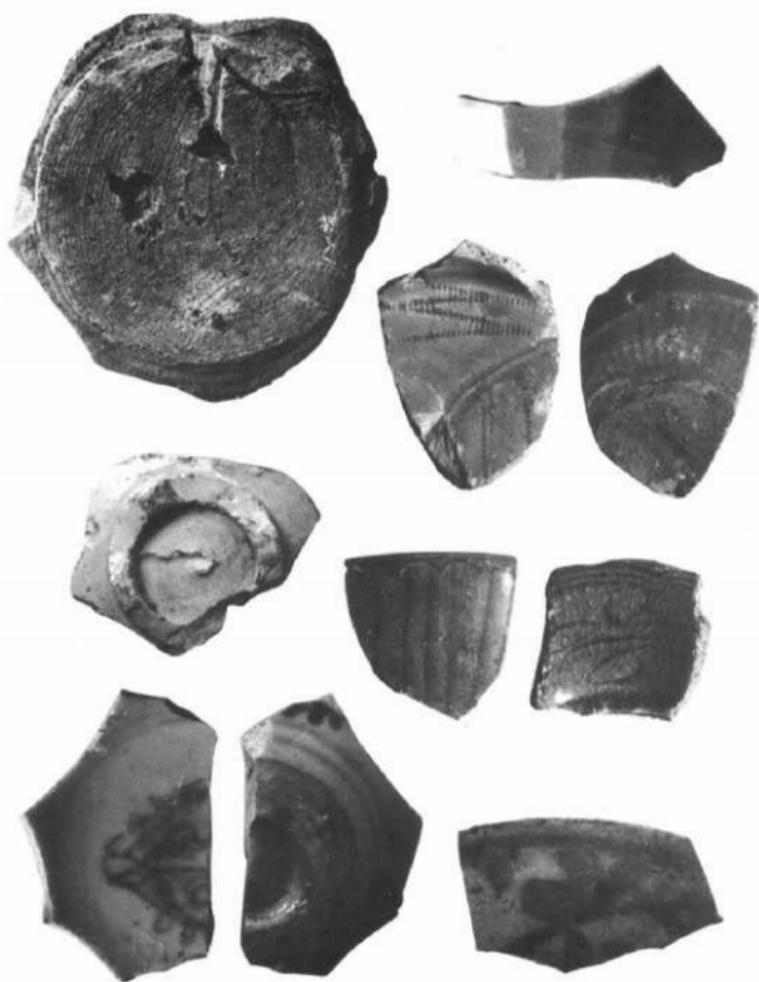


第1・11号竪穴住居跡出土遺物

図版
13



第12号竪穴住居跡出土遺物



祝吉遺跡出土中世遺物

都城市文化財調査報告書
第2集

祝 吉 遺 跡

発行 昭和57年3月31日
都城市教育委員会
印刷 (有)あべ全印刷